韓国語を母語とする日本語学習者の正の転移に関する一考察

――場所を表す格助詞「に」と「で」、格助詞「が」と係助詞「は」――

渡邉 亜子

The Positive Language Transfer Advantage of Native Korean Speakers as Japanese Language Learners:

A Preliminary Study of Structural Particles [wa] [ga] [ni] and [de]

Ako WATANABE

〈要　旨〉

対照分析仮説では、学習者は母語の影響を強く受け、言語間の類似点には正の転移、非類似点には、負の転移が働くととらえられてきた。しかし、1970年代以降、対照分析仮説に対する批判が強まり、現在は学習者には母語の違いにかかわらず共通の言語体系が存在するという中間言語理論にもとづく研究が増加している。本研究は、対照分析仮説と中間言語理論の両者に対する疑問点を、韓国語を母語とする日本語学習者の助詞「に」と「で」、「は」と「が」の運用の実態から考察し、正の転移についての新たな考え方を提案するものである。

〈キーワード〉

正の転移、「ユニット形成のストラテジー」、帰納的正の転移、演繹的正の転移

1．はじめに

韓国語を母語とする日本語学習者（以後学習者）の習得速度に関して、梅田は「J（日本語）とK（韓国語）は文法構造が似ていて双方の学習者にとって学びやすい言語だとよく言われるし、また事実韓国の学生たちは他の国の学生にくらべると確かにヨリ速くヨリたやすくJ（日本語）を習得しているようである」（1985：48～49）（注1）と述べている。李も「韓国人学習者は日本語が習いやすいだろうということは周知のとおりである。入門期の段階では確かに速い」と指摘している（1990：33）。

確かに、韓国語を母語とする学習者の日本語の習得にかかる時間は、日本語を学ぶ他の母語の

学習者に比べ少ない。渡邉は、大学で学ぶ学習者の発話に関する調査で、言語資料の提供協力者である中国語母語話者、ドイツ語母語話者、韓国語母語話者、それぞれ5名ずつに、日本語学習歴についての聞き取りをおこない、学習時間を算出した。その結果、中国語母語話者の平均は1240時間、ドイツ語母語話者1258時間、韓国語母語話者は782時間であった（1996：6）。

この理由としてあげられることは、対照言語学的に言えば、韓国語と日本語の言語間の類似点が多いことである。塚本は、「言語間に違いがない場合には、違いがある場合に比べると、教授者は学習者に学習内容を理解させるのにあまり時間をかけずに済ませることができる」と述べている（1990：74）。このことは、つまり、学習者の母語が学習を促進させるほうに影響しているということである。

韓国語を母語とする学習者の母語が日本語学習にプラスに働く、つまり正の転移の例の一つに、他の学習者にとっては習得が難しいといわれている「は」と「が」の運用がある。石田は、学習者の「は」と「が」の運用について、「韓国人学習者を除いては、初級から上級に至るまであらゆるレベルで問題になる」と述べている（2000：135）。裏返せば、韓国人学習者は、「は」と「が」の運用についてあまり問題がないということである。この理由として、韓国語は日本語と統語的に似ていること、日本語の助詞「は」と「が」に対応する言語形式、nŭn／ŭn(は)、ga／ｉ(が)があり、このことが日本語学習にプラスに働いていると考えられる。

しかし、文法項目によっては、韓国語に日本語と似た用法の言語形式があるにもかかわらず、「は」と「が」のような正の転移と考えられる運用実態が現れない助詞がある。それが、本稿で扱う場所を表す格助詞「に」と「で」である。

日本語の格助詞「に」は、存在文で存在の場所を示すときに使われ、「で」は動詞の表す動作・事柄の生じる場所を示す。韓国語にも、日本語の「に」と「で」にパラレルに対応するｅとe-seoがあり、ｅは名詞について場所を表し、e-seoは名詞について物事が動いている場所を表す。しかし、韓国語母語話者の「に」と「で」の運用に問題があることを迫田が報告している(2001)。

では、なぜ「は」と「が」の場合は母語の影響を受け、学習上問題が生じないのに、場所を表す格助詞「に」と「で」の場合は問題が生じるのか。

本稿の目的は、この疑問を解く糸口を探ることである。なお、本稿では、テレンス・オドリンに従い、「母語の影響」と「転移」を同義で使用する（1995）。

2．問題の所在

韓国語母語話者の「は」と「が」の運用について、やや詳しく述べると、まったく問題がないというわけではない。「それは何ですか」と日本語でいうべきところを、「それが何ですか」と表現する傾向があることは従来指摘されている。梅田は、このことについて、K（韓国語）の場合には疑問文においてもハ（nŭn／ŭn）とガ（ga／ｉ）の区別がそのまま維持され何らの強調もなくneutralに質問する場合はN1（指示代名詞）にga／ｉガという助詞を用い、他の物との対比

において尋ねる場合にはじめてnŭn／ŭn(ㅅ)が用いられると説明している（1985：53)。また、「この助詞は多くの例においてパラレルにとらえることができるのだが、微妙なところで微妙なズレがある」と述べている（1985：53～54)。

このように、日本語の「は」と「が」と韓国語のnŭn／ŭnとga／iは用法上、ぴったり重なり合うという関係ではないが、菅野によれば用法は似ているということである（1990：257)。このことが「韓国人学習者を除いては」という石田（2001）の指摘にあるとおり、「は」・「が」の運用であまり問題が生じないことの理由と考えられる。

一方、場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分けに関しては、韓国語を母語とする学習者の運用実態に問題があることが、迫田によって報告されている（2001)。迫田は、場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分けは学習者にとってなかなか習得しにくく、誤用例の報告が多くなされているが誤用の原因についての明解な根拠が提示されていないとし、次のような誤用の根拠を求める調査をおこなった（2001：17)。

調査は、「位置＋に」の問題、「つくえの上（　　）おいてあるりんご（　　）もらってもいい？」、「位置＋で」の問題、「れいぞうこの中（　　）きのう買ったパンがかたくなっている」、「地名＋に」の問題、「学生会館（　　）アメリカからの留学生が10人とまりました」、「地名＋で」の問題、「金さんは12才から東京（　　）育ったので日本語が上手です」など、49問の穴埋め問題で、正答率を求めるものである。対象は、中国語母語話者、韓国語母語話者、その他、日本語母語話者各20名である。

調査の結果を迫田は、「母語の違いによる差はほとんどみられなかった。したがって、場所を表す格助詞『に』と『で』の使い分けに母語の影響はない」と述べている（2001：20)。つまり、日本語の「に」と「で」にそれぞれ対応する言語形式が母語にある韓国語母語話者も、対応する言語形式が母語にない中国語母語話者も、「に」と「で」の習得状況がほぼ似ているという結果である。

誤用の根拠については、次のように述べている。「『位置を示す名詞（例：中、前)＋に』『地名や建物を示す名詞（例：東京・食堂)＋で』の固まりを形成し、後続の動詞を考慮することなく助詞を選択するためであると考えられる」(2001：21)。

中国語を母語とする学習者が場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分けができないということについては、顧（1983）ですでにその原因が母語にあるということが分析されている。中国語では「在」ひとつで、日本語の場所を表す格助詞「に」と「で」をまかなっていることが、誤用の原因であるとしている（1983：108)。

では、なぜ、韓国語には日本語の「に」に対応するe、「で」に対応するe-seoがあるにもかかわらず、韓国語を母語とする学習者は使い分けができないのか。この結果は、筆者にとってきわめて興味深く感じられた。

そこで、本研究では、韓国語母語話者の「は」と「が」の運用および場所を表す「に」と「で」の運用について、影響の仕方になぜ違いがあるのか、母語と対照させて、転移の実態につ

いて考察する。

なお、考察に際しては、日本語との文法的類似点がほとんどない中国語の母語話者との比較をおこないながら、検討を進めていく。

3．調査方法

(1)「は」と「が」の調査

調査時期：2001年から2003年

調査対象：短期大学１・２年に在学する中上級レベルの学習者（韓国語母語話者６名、中国語母語話者８名）と日本語母語話者（18名）

手 続 き：天野祐吉『バカだなア』（ちくま文庫236ページ）の「は」８箇所、「が」５箇所を空欄にした穴埋め問題の質問用紙を作成して配布。解答後に学習者の母語の表現について質問をおこなった。

(2)「に」と「で」の調査

調査時期：2003年10月２日

調査対象：短期大学１・２年に在学する中上級レベルの学習者（韓国語母語話者３名、中国語母語話者18名）と日本語母語話者（１名）

手 続 き：「位置＋に」、「位置＋で」、「地名＋に」、「地名＋で」の穴埋め問題20問を作成。この20問のうち４問は迫田（2001）と同様、あるいは若干変更したものである。質問用紙（資料）を配布し、解答後回収。次に、同じ内容の質問用紙を再度配布し、日本語で書かれた各問題を学習者の母語に訳してもらい、回収した。

4．結果と考察

(1)「は」と「が」の調査結果

表１　母語別正答率　（%）

	日本語母語話者	韓国語母語話者	朝鮮語母語話者	中国語母語話者
①	100	100	75	38
②	100	100	75	50
③	100	100	100	25
④	100	100	100	88
⑤	100	100	100	28
⑥	94	80	50	63
⑦	100	100	100	75
⑧	94	100	100	63
⑨	100	100	100	100
⑩	100	100	100	50
⑪	94	80	75	50
⑫	100	100	75	50
⑬	100	100	100	63

正答率をみると、石田で指摘されている（2001）とおり、韓国語母語話者の「は」と「が」の運用における正答率は高い。正答率が低い⑥と⑪は、日本語母語話者にもバリエーションがみられ、運用の上でゆれがあると考えられるものである。それ以外は正しく解答している。韓国語母語話者の正答率は、中国語母語話者の正答率と比較するとその差は大きい。また、中国語と朝鮮語のバイリンガルである学習者は、中国語母語話者よりも正答率が高い。

そこで、韓国語母語話者一人一人に、日本語の「は」と「が」の箇所は韓国語ではどのような言語形式を使用するかについて質問したところ、「は」は nŭn／ŭn、「が」は ga／ i と、すべて対応していた。また、日本語の「は」と「が」が、母語の nŭn／ŭn と ga／ i に対応していることを知っているという回答であった。正答率の結果および学習者の意識から、韓国語母語話者の「は」と「が」の運用に問題があまり生じない理由として、母語に日本語と似た同じ言語形式があり、学習者はその知識を利用していると考えてよいであろう。

(2) 場所を表す「に」と「で」の調査結果

調査結果は、表２のようになった。筆者の調査でも、迫田の結果（2001）に似ており、韓国語母語話者は中国語母語話者より「場所名＋で」の正答率がやや高いものの、中国語母語話者同様、「場所名＋に」と「位置＋で」の正答率は低く、母語に対応する言語形式のない中国語母語話者とほぼ同じ結果であった。

表２　各質問の正答率　（%）

	韓国語母語話者	中国語母語話者	日本語母語話者
場所名＋に	67	67	100
場所名＋で	100	82	100
位置＋に	87	86	100
位置＋で	67	53	100

そこで、韓国語母語話者３名（A、B、C）の質問用紙に記入された韓国語の訳と対応させて日本語の誤りの原因を探ることにした。正答率の高い「場所名＋で」から順番に「位置＋に」、「場所名＋に」、「位置＋で」をグルーピングして母語と対応させたものが表３である。番号は質問用紙の問題の番号である。なお、前述したが、「に」に対応する韓国語は e 、「で」に対応する韓国語は e-seo である。

表3　日本語と母語の対照表

学習者	A		B		C	
質問	日本語	韓国語	日本語	韓国語	日本語	韓国語
4場所名＋で	で	e-seo	で	e-seo	で	e-seo
8場所名＋で	で	e-seo	で	e-seo	で	e-seo
9場所名＋で	で	e-seo	で	e-seo	で	e-seo
11場所名＋で	で	e-seo	で	e-seo	で	e-seo
19場所名＋で	で	e-seo	で	e-seo	で	e-seo
1位置＋に	に	e	に	e	に	e
7位置＋に	に	e	に	e	に	e
10位置＋に	に	e	に	e	に	e
13位置＋に	に	e	※で	e	に	e
14位置＋に	に	e	に	e	に	e
3場所名＋に	に	e	※で	e	に	e-seo
12場所名＋に	に	e	に	e	※で	e
17場所名＋に	に	e	に	e	に	e
18場所名＋に	に	e	※で	e	に	e
20場所名＋に	に	e	※で	e	※で	e
2位置＋で	※に	e	で	e	※に	e-seo
5位置＋で	で	e-seo	で	e-seo	で	e-seo
6位置＋で	※に	e	※に	e	で	e-seo
15位置＋で	で	e-seo	で	e-seo	で	e-seo
16位置＋で	で	e-seo	※に	e-seo	で	e-seo

※誤答

表3について、学習者ごとに母語と対応させて考察する。

学習者Aの正答率は「場所名＋で」、「位置＋に」、「場所名＋に」が100パーセント、「位置＋で」が60パーセントである。20問すべてが母語と対応しており、日本語2と6の「位置＋で」の誤りの原因は、母語と同じ用法にした結果である。なお、日本語3、2、6の母語の用法については、学習者で意見が分かれている。学習者Aに日本語の場所格「に」と「で」と、韓国語のeとe-seoの対応関係について聞いたところ、対応関係は知っている、対応していることを教えてもらったことがあるという回答であった。このことから、学習者Aは母語の知識を利用していると考えられる。

学習者Bは「場所名＋で」は100パーセントであるが、「位置＋に」は60パーセント、「場所名＋に」が40パーセントと低く、「位置＋で」が60パーセントである。3、18、20は「場所名＋に」にすべきところを「で」にし、13は「位置＋に」にすべきところを「で」にしている。16は

「位置＋で」にすべきところを「に」にしている。母語の運用状況と対応させると、3、18、20の母語はすべて日本語の「に」に対応するeであり、日本語では「で」としていることから、母語の正の転移は生じていないと考えられる。13は、母語では日本語の「に」に対応するeを使っており、16は、母語では日本語の「で」に対応するe-seoを使っていることから、母語の正の転移は生じていないと考えられる。

学習者Cは、「場所名＋で」「位置＋に」が100パーセント、「場所名＋に」が60パーセント、「位置＋で」が80パーセントである。12、20、2が誤答である。12は「場所名＋に」を「で」に、20は「場所名＋に」を「で」にしたもので、母語では、日本語の「に」に対応するeがつかわれている。また、2は「位置＋で」とすべきところを日本語では「に」にし、母語では、「で」に対応するe-seoが使われている。したがって母語の正の転移は生じていないと考えられる。

学習者BとCの結果を得た後、日本語の場所格「に」と「で」が、韓国語のeとe-seoにそれぞれ対応していることについて知っているかと聞いたところ、対応関係があることは知らないという回答であった。日本語学校で、場所のときは『で』で、上とか下は『に』と習ったというのである。学習者Bの3、18、20の「場所名＋に」を「で」に、16の「位置＋で」を「に」にしている誤用がみられること、母語の言語形式に影響を受けていないこと、また、学習者Cも、12の「場所名＋に」を「で」に、20の「場所名＋に」を「で」にし、母語の影響を受けていないことから、迫田の「ユニット形成のストラテジー」(2001) をとっている可能性が強いと思われる。

学習者BとCの回答は、実は筆者にとっては意外であった。2名の韓国語母語話者は、「は」と「が」が韓国語のnŭn／ŭnとga／i　に対応していることは知っている。しかし、日本語の「に」と「で」が母語のeとe-seoに対応していることは知らなかった。知らないということは、類似点に気がついていなかったということである。

このことから、学習者が母語と目標言語との文法項目における類似点を判断する場合、意識されやすい類似文法項目と、意識されにくい類似文法項目があることが推測される。

意識されやすい文法項目とは、学習者が学習過程で帰納的に母語との対応関係に気がつくもの、あるいは正の転移が自動的に発生するものであり、意識されにくい文法項目とは、帰納的に対応関係に気がつかないものである。eとe-seoは、日本語の場合と同様、存在を表す場所と動作をする場所の違いであり、それも文末の動詞の違いであり、母語話者がこの違いを気づいていないことが考えられる。

これに対して、日本語の「は」と「が」に対応するnŭn／ŭnとga／iは、前後の文脈から規定される主題や主語を表し、初級のはじめから提出される文法項目であること、日本語の「が」と韓国語のgaが音声的に似ていることなど、帰納的に意識されやすく、覚えやすいのではないだろうか。

しかし、「に」と「で」の場合、意識されにくくても、韓国語母語話者はいったん演繹的な方法で知識として獲得し、意識下においた後は、容易にその知識を駆使できると考えられ、知識を

獲得した後は正答率は高くなるであろう。この点が、中国語母語話者のように、母語では「在」ひとつでまかなっている学習者とはことなる。

5．結　論

韓国語母語話者、中国語母語話者の場所を表す助詞「に」と「で」の誤用の背景を「ユニット形成のストラテジー」ととらえた迫田の報告（2001）は、確かに学習者の誤用の原因を的確に説明し、説得力がある。しかし、韓国語を母語とする学習者の格助詞「に」と「で」の使い分けに、正の転移がはたらいているとみとめられるものもあり、学習者の母語の違いによる運用状況を考慮しない中間言語理論のとらえかたに疑問を感じる。

格助詞「に」と「で」の運用を演繹的知識の獲得によって正しく運用できている学習者Aのような場合を、母語の影響はないと言い切ることはできない。演繹的知識が、正しい運用に容易に結びつくのは、やはり母語と目標言語である日本語に類似点があるからである。母語との対照がなされず、演繹的知識を得ていない段階では、ユニット形成のストラテジーがとられる可能性が強いが、もし、教師が韓国語母語話者に母語のe, e-seoと日本語の「に」と「で」の対応関係を示せば、韓国語母語話者は初級段階でおそらく中国語母語話者や他の言語の学習者とはことなる正答率の高い習得状況になるであろう。

野田は、学習者の母語の違いにかかわらず、場所を表す「に」と「で」の使い方に、学習者独自の文法が見られるとし、その原因を「母語話者の日本語や教科書の日本語に、そのようなニセの文法規則があるかのように見せかける性質があるからである」と述べている（2001: 54)。野田によれば、日本語母語話者の会話では、「～の中」「～の上」は「で」と結びつきにくく、「に」と結びつきやすいという傾向があり、また、日本語を学習するときに使用する教科書でも、「中」、「上」、「前」は場所を表す「に」と結びついた形で導入されることが多いと述べている(2001：53)。

確かに、日本で日本語を学習する第2言語学習者（JSLA）は、日本語母語話者の使用状況に影響されることはおおいに考えられる。しかし、母語に対応する言語形式があるという知識があれば、ニセの文法をつくりあげることはないのではないか。

指導法を視野に入れて考えると、韓国語母語話者の場合は母語の影響を考慮して、学習が促進されるよう、母語と日本語の対応関係を教えるほうがよいと考える。これは、母語に対応する言語形式をもたない中国語母語話者への指導法と大きく異なる点である。

最後に本稿のまとめとして、つぎの点を提案する。

これまでの対照分析仮説では、韓国語母語話者の「に」と「で」の誤用について説明することができないことは明確である。母語と目標言語が似ていても意識されなければ正の転移がはたらかない文法項目もあるからである。一方、韓国語母語話者は中国語母語話者同様、母語の影響を受けず、「ユニット形成のストラテジー」をとるということも断定できないのではないか。母語

の知識を利用している学習者もいると考えられるからである。したがって、韓国語の正の転移については、意識されやすく、自動的に正の転移を生じさせる帰納的なものと、意識しにくいがいったん意識化されると母語と目標言語の類似点から演繹的に正の転移をもたらすものに分けて考える必要があると思われる。

韓国語のように日本語に対応する言語形式が母語にある場合、学習者の知識の差には開きがあることが予測される。本研究では3名であり、一般化することはできないが、ある学習者はかなり高い正答率を示し、ある学習者は、「ユニット形成のストラテジー」をとり、誤答が多かった。平均化された数値では、個々の実態は見えてこない。このようなことが、おそらく他の韓国語母語話者にもあると予測される。今後、学習者数を増やし、日本語との文法的類似点を多く持つ韓国語を母語とする学習者の、帰納的正の転移と演繹的正の転移の実態をより詳しく把握したい。

なお、韓国語を母語とする学習者の学習上の問題点についての情報を、本学科留学生の黄多玉さんからいただきました。ここに謝して御礼申し上げます。

参考文献

梅田博之1982「韓国語と日本語－対照研究の問題点」『日本語教育』48号：31～42頁　日本語教育学会
梅田博之1985「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』55号：48～58頁　日本語教育学会
顧海根1983「中国人学習者によくみられる誤用例－格助詞、係助詞『も』、接続助詞『て』などを中心に－」『日本語教育』49号：105～118頁　日本語教育学会
李鳳姫1990「上級の日本語教育－韓国人の場合－」『日本語教育』71号：33～43頁　日本語教育学会
塚本秀樹1990「日朝対照研究と日本語教育」『日本語教育』72号：68～79頁　日本語教育学会
菅野裕臣1990「朝鮮語と日本語」『講座日本語と日本語教育』第12巻：241～265頁　明治書院　森下喜一・池景来（1992）韓対照言語学入門』白帝社
テレンス・オドリン1995『言語転移』リーベル出版
ロッド・エリス1996『第二言語習得序説　学習者言語の研究』研究社
渡邉亜子1996『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
石田敏子2000『日本語教授法』大修館書店
迫田久美子2001「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1)－場所を表す『に』と『で』の場合－」『広島大学日本語教育研究』11：17～22頁　広島大学教育学部日本語教育学講座
野田尚史2001『日本語学習者の文法習得』大修館書店

註

1）梅田氏の論文では、日本語と韓国語をそれぞれ「J」、「K」と表しているが、本稿の文脈からは、それを判断することが難しいので（　　）内に日本語、韓国語と入れた。
2）本稿は、2003年10月30日の田園調布学園大学合同研究会で発表したものに手を加えまとめたものである。

資料

①つくえの上（　　）おいてあるみかん（　　）食べてもいい？

②れいぞうこの中（　　）きのう買ったハムがかたくなっている。

③学生会館（　　）ドイツからの留学生が10人とまりました。

④林さんと金さんは10歳から東京（　　）育ったので日本語が上手です。

⑤黒板の前（　　）話してください。

⑥テレビの上（　　）ねこが寝ている。

⑦箱の中（　　）ケーキが４つ入っている。

⑧学生会館（　　）クリスマスパーティーをしました。

⑨大阪（　　）万国博が開かれました。

⑩駅の前（　　）タバコ屋（　　）果物屋があります。

⑪大阪駅（　　）高校時代の友達に会いました。

⑫京都（　　）はたくさんのお寺があります。

⑬いすの下（　　）お金が落ちています。

⑭机の上（　　）本が置いてあります。

⑮お金がなかったので、昨日は橋の下（　　）寝ました。

⑯いい天気だから外（　　）遊びましょう。

⑰主人は今郵便局（　　）います。

⑱北海道（　　）いる兄に電話（　　）かけました。

⑲お金は銀行（　　）おろします。

⑳昨日六本木（　　）ある権八という有名なレストランに行きました。